

二〇二三年度入学試験問題

国語 (六〇分)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子は開かないでください。
- 二、この問題冊子は24ページあります。試験中、ページの脱落等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 三、解答用紙(マークシート)の汚れなどに気づいた場合も、同様に知らせてください。
- 四、解答用紙(マークシート)は折り曲げたり、汚したりしないでください。
- 四、解答は、すべて解答用紙(マークシート)に記入し、解答用紙(マークシート)の枠外には、なにも書かないでください。
- 五、解答番号は、1～40まであります。
解答用紙(マークシート)には、問題番号が1～50、選択肢が①～⑩まで印刷されていますが、解答にあたっては、各設問に指示された選択肢の数の中から選んで解答してください。
- 六、マークは必ずHBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は、完全に消してからマークしてください。
- 七、監督者の指示に従って、解答用紙(マークシート)に解答する科目・受験番号をマークするとともに、受験番号および氏名を記入してください。
- 八、解答する科目、受験番号、解答が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「やさしさ」について考える、などというのと、すぐにかつて流されていた「とんねるず」のCMの一場面を思い出す。^(注1)夕陽を背に、窓枠に腰をおとした木梨憲武が、「なあみんな、やさしさについて考えようじゃないか」と、大まじめに、しかし明らかにそうした言いように茶化^{ちやか}してみせている一場面である。

確かに「やさしさ」について考えるということには、そうした茶化しをいれたくなるような、ある種の気恥ずかしさ、さらにいえば欺瞞^{ぎまん}めいたものがまわりつく。どこか「うそくさい」(わざとらしい)のである。

何故^aだろう。「やさしさ」について考えるということが、どうして「うそくさい」感じられてしまうのだろうか。あるいはそこにも、この「やさしさ」という言葉の現在の位相が映し出されているのかもしれない。

高度成長を続けていた日本経済は、七〇年代に入りかげりを見せ、七四年にははじめてマイナス成長に転ずる。この七四年に、流行語として登場してきたのが、「やさしさ」と「終末論^(注2)」である。以来二〇年、今日にいたるまで、「やさしさ」は「終末論」とともに巷に氾濫することになる。

結婚したい相手の条件のアンケートでは、「やさしさ」は常にトップに挙げられているし、本屋の書棚には、「やさしさ」「思いやり」「氣くばり」等々の文字を配した書名(「やさしいパソコン入門」「やさしい英会話」といった「やさしさ」もふくめ)の本が、所せましと並んでいる。また、「肌によさしい」「環境によさしい」「自然によさしい」……云々のCMコピーは、今や食傷以上の何ものでもない、いささかのカンキ力も持たない常套句^{じょうたうく}となり下がっている。

一九九四年、時の村山首相は、「やさしい」という言葉をみずからの政治理念を表わす言葉として五度ほど使ってその所信表明演説をした。「人にやさしい政治」「強い国よりもやさしい国」「人類へのやさしさ」「男性と女性がやさしく支えあい」等々……といった具合に。

つかこうへいならずとも、「一億総『やさしく』し」といってどんな魂胆^{こんたん}があるのかと聞きたくな「るような「やさしさ地獄」(つかこうへい『傷つくことだけ上手になって』角川書店 昭和57)の現出、というべきかもしれない。

当然そうしたところでは、言葉は、いわば言葉としてのインフレ^dを起こさざるをえないだろう。くだんの所信表明演説がそうであったように、「やさしい」という言葉は、口当たりのいいイメージだけが、キシヤクされて広がり、その具体的な中味はいよいよ曖昧で空虚なものになってこざるをえない。そしてまた、このような「やさしさ」の風化・拡散は、そのさきに、従来では見られなかったよう

な変質した「やさしさ」をも生むことになる。

大平健『やさしさの精神病理』（岩波書店平成7）は、精神医学の立場から現代の若者に蔓延まんえんしているある種の「やさしさ」をとりあげ、それらはたとえば、親から小遣いをもらってあげる「やさしさ」とか、席を譲らない「やさしさ」、好きでもないのに結婚してやる「やさしさ」等々、従来にない独特な意味の「やさしさ」であるとシテキfし、そうした「やさしさ」にこだわり呪縛じゆわくされている若者の「やさしさの精神病理」を詳しく分析している。

と、このように見てくると、「やさしさ」とは遂ついに、「うそくさく」ふやけたイメージ用語か、さもなれば、「精神病理」の対象用語でしかなくなつてしまつたように見える。はたして「やさしさ」は、倫理用語としてはすでもう、いわばその耐用年数を過ぎてしまつたのだろうか――。

そうではないだろう、と私は考えたい。そしてそう考えるところから、この本は着想されている――私は人生のいろいろな場面で人に「やさしく」されたいし、またできうるならば「やさしく」したいと思つている。そしてそのときの「やさしさ」に、私は、倫理用語としての、ある確かな語感を感じている――のであるが、しかし、そんな主観的想念をただ語つても仕方ないだろう。それでは「考える」ということにはならない、からである。

現に目の前に事実としてある問題は、「やさしさ」という言葉がいかにインフレ・拡散を起まこしていようとも、「やさしさ」はそれだけ広く様々に求められているということであり、また（「精神病理」的になるまでの事態もふくめて）深く切実に求められているということである。

「やさしさ」について考えるということは、まずgは「こうした事実をどう考えるか」ということであろう。それはむろん、まず「やさしさ」ありきの天下りのお説教でも、逆に、その倫理的無効をただあげつらうダンザイhでもない。まずはこのような事実のあることを認め、その事実を踏まえて、そこでの「やさしさ」の中味を分析しその問題点をプラス・マイナスふくめて慎重に検討することであろう。

そしてその上で、というよりそれと同時に為なすべきことは――ここではそちらのほうがより重要なのであるが――、「やさしさ」が、古語「やさし」から持ち来たつた歴史的ふくらみを明らかにし、それとつき合わせて考えようということである。こと生き方において、人は、人が生きてきたものを措おいて新しいものを創り出すことはできないからである。現在もつとも積極的に「やさしさ」を説いている思想家の一人である花崎皋平（注）はなざきこうへいの言葉をかりていえば、『共生』の倫理は、日本と日本人にとつては、民族的に固有な、歴史の過去を負つたものである内実をふくむものでなければならぬ（『アイデンティティと共生の哲学』筑摩書房平成5）からである。

かつて戦後の混乱期のなかで、「家」のあり方に危機感を感じた柳田国男は次のように述べていた。

家はどうかなるか、又どうなつて行くべきであるか、もしくは少なくとも現在に於て、どうなるのがこの人たちの心の願ひであるか。それを決する為にもまず若干の事実を知つて居なければならぬ。明治以来の公人はその準備作業を煩わしがつて、努めてこの大きな問題を考えまいとして居たのである。

（『先祖の話』昭和20）

「まず若干の事実を知つて居なければならぬ」という控えめな言い方に、かえつて柳田の決意の深さを窺うことができる。「家」がいかに存在し来たつたかという「事実を知」といつた「準備作業」ぬきに、「家」の「どうあるべきか」は論じられない、にもかかわらず、明治以来われわれはそうした大事な作業を怠つてきたところに現在の危機がある、というのである。柳田の、あの膨大な「学」の営みは、すべてそうした「準備作業」であつた。

ここでは、今の文章の「家」を「やさしさ」に変えて、このような柳田の仕方をそのまま学びたいと思う。「家」へのアプローチと「やさしさ」のそれとでは、おのずと異なるところがあることはいうまでもないが、もつとも身近な「共生の倫理」を考えると、「学」の営みの基本姿勢として、である。つまり、「やさしさ」について考えるという営みのまずもつての根本に、その「やさしさ」とは一体何であつたのかを明らかにすること、そのことを据えたいということである。

後にも述べるように、「やさしさ」は、太宰治のキーワードのひとつであるが、その太宰に次のような文章がある。

文化と書いて、それに文化というルビを振る事、大賛成。私は優という字を考えます。これは優れるという字で、優良可なんていうし、優勝なんていうけど、でも、もう一つ読み方があるでしょう？ 優しいとも読みます。そうして、この字をよく見ると、人偏に、憂うると書いています。人を憂うる、ひとの淋しさ侘しさ、つらさに敏感な事、これが優しであり、また人間として一番優れている事じゃないかしら、そうして、そんな、やさしい人の表情は、いつでも含羞であります。私は含羞で、われとわが身を食っています。酒でも飲まなげや、ものも言えません。そんなところに「文化」の本質があると私は思います。「文化」が、もしそれだとしたなら、それは弱くて、敗けるものです、それでよいと思います。私は自身を「滅亡の民」だと思つています。まけてほろびて、その眩きが、私たちの文学じゃないのかしらん。

（『河盛好蔵宛書簡』昭和21）

ここで太宰は、「文化」（それはすくれて「日本文化」のことを指しているが）の本質に「優しさ」を見て取つている。この文章は、

「やさしさ」を考えるに当たって大切な「含羞」「憂え」「敏感」「弱さ」「滅亡」といった諸要素がまとまって語られており、その点でも注目されるがそれはあとで考えるとして、ここではともかく、「優しさ」こそ「文化」の本質である、といった一文学者のドウサツを確認しておけば足りる。

実際、以下に詳しく追跡するように、「やさし」という言葉は、『万葉集』の時代より現代にいたるまで、様々に倫理的（あるいは美的）に重要な場面で繰り返し使われてきた、決して他に置き換えられない大切な言葉である。その歴史的厚みだけをもつてしても、あるいは本質のひとつを表わしているといえるのかもしれない。

ただ、この言葉はそうでありながら、その内包する意味を少しずつ変えてきた言葉でもある。時代に応じて少しずつ意味を変えながら、その時代その時代の、ある大事な心や事のありようを表わしてきたのである。それゆえ、「やさしさ」とは何であったのかを明らかにすることは、そのひとつひとつの歴史的移り変わりを、また、その根底に流れている基層のあり方を明らかにすることになるだろう。

そうすることによって、日本人にとつての「やさしさ」の意味を、とりわけ現在危機に瀕しているわれわれにとつての「やさしさ」の意味を、またその倫理的可能性如何を考えてみたい、ということである。

（竹内整一『日本人は「やさしい」のか——日本精神史入門』による）

（注） 1 とんねるず……木梨憲武と石橋貴明（たかあき）からなるお笑いコンビ。

2 終末論……ここでは、一九七〇年代から九〇年代に日本で世界の終わりに関する本などが流行したことを指す。

3 村山首相……村山富市第八十一代内閣総理大臣。一九九四年六月から一九九六年一月まで在職した。

4 つかこうへい……劇作家・小説家・演出家（一九四八—二〇一〇）。

5 花崎皋平……哲学者・著述家（一九三一—）。

6 すぐれて……特に、とりわけ。

問一 傍線部 a 「やさしさ」について考えるということが、どうして「うそくさく」感じられてしまうのだろうか」とあるが、その

理由はなにか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 。

- 1 「やさしさ」は経済成長がマイナスに転じたことから目をそらすための欺瞞に過ぎないから。
- 2 「やさしさ」は取り立てて考える必要がないほどすでに人々の生活に定着しているから。
- 3 内容を伴わない「やさしさ」という表面的な言葉が独り歩きしている状態だから。
- 4 使い古された「やさしさ」という概念について議論してもなにも生まれないから。

問二 傍線部 b・e・f・h・m と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマ

ークしなさい。解答番号は ～ 。

b 「カンキ」

- 1 証人としてショウウカンされる。
 - 2 貯めたポイントをカンキンする。
 - 3 父はもうすぐカンレキを迎える。
 - 4 しばしごカンダンをお楽しみ下さい。
- e 「キシヤク」

- 1 今が人生のブンキ点だ。
- 2 人間関係がキハクになってきている。
- 3 太陽系惑星のキドウ。
- 4 成功するまではキキョウしないと誓う。

f 「シテキ」

- 1 職業のテキセイを検査する。
- 2 手術で腫瘍をテキシュツする。
- 3 予想が見事にテキチュウする。
- 4 前回対戦した相手をテキシする。

h 「ダンザイ」

- 1 ザイ|ア|ク|感にさいなまれる。
- 2 カザイ|を|補償の|対象にする。
- 3 ザイ|ライ|線の|電車で行く。
- 4 センザイ|を|買い足す。

m 「ドウサツ」

- 1 結果が出なければインド|ウ|を渡すように言われた。
- 2 シンド|ウ|と呼ばれている幼いバイオリニスト。
- 3 探検家たちはドウ|ケツ|の中で古代の遺物を発見した。
- 4 原発の再カド|ウ|について議論する。

問三

- 傍線部 c 「常套句」の意味はどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 7。
- 1 いつも決まって使う文句
 - 2 道理に合わない理屈
 - 3 形式的で意味のない表現
 - 4 嫌な感じのする言葉

問四

- 傍線部 d 「言葉としてのインフレ」とあるが、筆者はどのようなことを「インフレ」と表現しているか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 8。
- 1 「やさしさ」という言葉の意味が解体され、利便性だけが追求されるようになること。
 - 2 「やさしさ」という言葉が本来持っていた価値を失い、次第に使われなくなること。
 - 3 「やさしさ」という言葉で表現される意味内容が時代とともに増え続けること。
 - 4 「やさしさ」という言葉が漠然としたいい印象だけで吟味のないまま広がり続けること。

問五 傍線部g「こうした事実」とあるが、それはどのような事実か。次の1〜4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 9。

- 1 どのような形であれ「やさしさ」は人々に広く、深く求められているという事実。
- 2 「やさしさ」についての主観的な感想を述べても、考える、ことにはならないという事実。
- 3 世間は一部では病的と言えるほどまで深刻に「やさしさ」を求めているという事実。
- 4 「やさしさ」は風化・拡散を経てもなお倫理として機能しなくなったわけではないという事実。

問六 傍線部i「やさしさ」が、古語「やさし」から持ち来った歴史的ふくらみを明らかにし、それとつき合わせて考える」とあるが、それはどのようなことか。次の1〜4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 10。

- 1 古語「やさし」が使われていた頃から現在に至るまで、「やさしさ」がどのようなものと捉えられてきたか理解し、その上で「やさしさ」について考えるということ。
- 2 古語「やさし」の時代から続く意味こそが「やさしさ」の本質なので、「やさし」と「やさしさ」の共通点を踏まえて「やさしさ」について考えるということ。
- 3 「やさしさ」の本質を支える倫理は古語「やさし」に由来するという考えのもと、「やさし」についても軽く考慮に入れた上で「やさしさ」について考えるということ。
- 4 「やさしさ」が古語「やさし」から派生した歴史を振り返ることで、「やさしさ」がいかなる存在であったかを捉え、その後で「やさしさ」について考えるということ。

問七 傍線部j「今の文章の「家」を「やさしさ」に変えて、このような柳田の仕方をそのまま学びたいと思う」とあるが、その根底には筆者のどのような考えがあるか。次の1〜4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 11。

- 1 「家」や「やさしさ」について考えることは、危機を防ぐための「準備作業」であるという考え。
- 2 「家」へのアプローチは「やさしさ」へのアプローチとは異なるところがあるという考え。
- 3 「家」と「やさしさ」はどちらももともと身近な「共生の倫理」であるという考え。
- 4 もっとも身近な「共生の倫理」を考えることが「学」の営みの基本姿勢であるという考え。

問八 傍線部k「太宰治」の作品でないものはどれか。次の1～4のうちから適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は

12。

- 1 走れメロス
- 2 斜陽
- 3 津軽
- 4 火宅の人

問九 傍線部1「優しさ」こそ「文化」の本質である¹について、Yさんは引用されている太宰治の文章を参考に次のような意見をまとめた。傍線部1～4のうち、文章から読み取れないものはどれか。1～4のうちから適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は13。

太宰治が言うような「優しさ」が「文化」の本質である¹とすれば、日本文化は繊細さやつつましさを感じさせるものではないだろう²か。太宰治は自分たちの文学を「弱い」「滅亡³」という言葉で形容しているが、これは決して批判ではない。「淋しさ侘しさ、つらさ」をすくい上げる感受性を優れたもの⁴としており、そのような感受性に根づいた日本文化を誇るような気配すら感じさせる。「優し」「含羞⁴」という言葉で表現されている穏やかで純真無垢⁴な性質が、日本文化の根幹を成しているからこそ、弱い者の「眩き」が文学になるのだろう。

問題二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

民族とは何か、ある集団を民族たらしめる要素は何か。これらの問いに答えるのは、二重の意味でむずかしい。まず第一に、経済や政治にまつわる事象を説明しようとしたアダム・スミスや福沢諭吉などに匹敵する思想家が民族の分野には現れなかったために、万人を納得させる定義が見あたらない。民族は普通に考えられるほど古い産物ではなく、むしろ近代の現象なのに、学問的に正面きつて検討されなかつたのは不思議なくらいである。ナシヨナリズム^(注2)についても同じである。十九世紀ヨーロッパの知識人たちは、ナシヨナリズムが過渡的な現象であると信じた。そして、自分の属する民族と同じ広がりをもつ国家の市民でありたいという願望は、さして大胆な野心とも考えられなかつた。このために、民族という感情もナシヨナリズムもやがて衰えると楽観的に信じる者が多かつたのである。つい最近まで、民族に関する「スターリンの定義」が一部で尊重されてきたのは、それが社会科学の理論面ですぐれていたからではなく、学問さえ統制した独裁者の「デウス・エクス・マキーナ」(神の力)だったからである。

第二に、とくに日本では、民族と国民という別々のコンセプトをきちんと分けて議論しないことから混乱が生まれている。民族と国民の区別を本来もたない西欧の英仏語文献にたよつて考えると、「民族とは何か」という問いに混乱が生まれるのも当然だろう。たとえば、日本でもよく読まれた『想像の共同体』の著者ベネディクト・アンダーソンは、「ネーション」についてこう述べている。

ネーションとはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である——そしてそれは、本来的に限定され、かつ主権的なものとして想像される。ネーションは想像されたものである。というのは、いかに小さなネーションであろうと、これを構成する人びとは、その大多数の同胞を知ることもなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の聖餐^{せいさん}のイメージが生きているからである。この「ネーション」は、日本語訳者がそうしているように、「国民」の意味で理解することもできる。しかし、ここに「民族」という訳を入れても間違いというわけではなからう。日本でも多くの論者は、アンダーソンのこの箇所を「民族とは何か」を定義するために援用しており、とくに断らずに「民族」と「国民」のカテゴリーをあたかも互換可能であるかのように使う人もでてくる。つまり、「想像の共同体」とは、ある時には「民族」とも理解され、別の機会には「国民」の定義にもなってしまう、といった按配^{あんばい}なのである。あるいは、アンダーソンたちの用語法にこだわるあまり、日本でも「ネーション」という語をそのまま使って議論することもあるが、これは日本における社会科学の議論としてはあまりにも頼りない。「ナシヨナリズムとは、ネーションを尊重する思想の一形態である」というのは同義反復に近いし、「ネーション(民族・国民)は人種ではない」といつても「民族」と「国民」の違いを明らかにしたとはいえないだろう。しかし、日本では「民族」と「国民」の意味合いは明らかに違う。アンダーソンの定義に拘束されながら「民族」を

議論するいわれはないのである。実際に、いろいろな文献で「民族自決」^(注6)と訳される箇所では、もともと「ネーション」やその形容詞「ナショナル」が用いられている。それを「国民自決」と訳しても決して意味をなさないのである。

たしかに、歴史的に考えると、^b西欧とその文化がおよんだ北米ではかなり以前から、「国民」と「民族」の重なりを当然と考える傾向があった。そこでは、人びとのアイデンティティ（帰属意識）を表現する時に使われた「ナショナルリテイ」や「ナショナルリテ」の用語が、いづれも、民族性を含蓄しているとともに、かれらが市民もしくは臣民として所属する国家を指していたからである。また、英仏語を母語として使う人びとなら、「ネーション」という語によって自在に定義のゲームを楽しめるかもしれない。ここでは、人びとのアイデンティティを政治目的のために「国籍」で分類することも不思議には思われなかったからだ。

これは、北米や西欧の国際秩序観を基礎につくられた^c国連の性格を見るとよくわかるだろう。国際連合と訳される「ユナイテッド・ネーションズ」は、「諸国家の連合」か「諸国民の連合」には違いない。しかし、自前の主権国家をもたない「諸民族の連合」でないことだけはたしかである。国連は、独立した主権国家として国民を抱えている団体を受け入れるためにつくられた組織なのである。

こう考えてくると、「民族」と「国民」との関係がおぼろげながら明らかになってくる。いずれにしても、それらは「人種」とは違う。「人種」は、自然や生物学的な意味での類似性や遺伝性によって他から区別される人間の集合ともいえるだろう。皮膚や毛髪の色、容貌目の色、背丈の高低など肉体的、生物的属性に注目した分類や区別に基^dづいている。これにたいして、「民族」が問題になるのは、文化的特徴や心理的特性の文脈である。たしかに、「民族」も、ほとんど自然の流れのなかで「おのずから」生まれる。たとえば、長い自然の歴史プロセスであれ、「分離」という人為的な性急さによってであれ、「国民」になろうとすればなれる人間集団のまとまりである。

自決の単位として「民族」が最適とされるのは偶然ではない。「民族」という集団でなければ、「国民」として自前の主権国家をもつこともできないし、国連に加入することもできない。ある人びとが「民族」としてのまとまりをもつことは、主権国家の「国民」になれるか否かの最低条件だといってもよい。国民国家が成立するにはその核になる「民族」の存在が重要なのである。他方、「国民」とは、意識的な産物であり、ときには人工的につくりだされるものである。国旗や国歌はもとより、無名戦士の墓、戦勝記念碑、「皇祖皇宗」の墓廟^eといったシンボル、それにまつわる儀礼は形を変えて世界中のどこにでも見ることができる。

この点で、幕藩体制による地方割拠の弊や「小国分裂」を克服して、日本で「国民」の語が初めて一般的に用いられるようになったのが、明治四（一八七二）年の戸籍法制定の太政官布告だったことは象徴的である。それは、近代国家が領土主権だけでなく、教育・納税・兵役などの義務を受け入れる「国民」の存在を前提としたことを示すからである。それでも、福沢諭吉が明治七（一八七四）年

に『学問のすすめ』で嘆いたように、広がりをもった「国民」の誕生には相当な時間がかかった。「政府は依然たる専制の政府、人民は依然たる無気無力の愚民のみ」「日本には唯政府ありて、未だ国民あらずと云ふも可なり」というのである。「国民」というコンセプトが広く使われるようになったのは、明治二十(一八八七)年二月の『国民之友』(注7)の創刊くらいではないだろうか。自由民権運動の敗退によつて明治国家の基盤がゆるぎなくなつた時、徳富蘇峰(注8)が発刊した『国民之友』は、米誌『ネーション』(注9)からその誌名をとつたが、これは「新日本の新人民」としての「国民」という意識がある程度まで成熟したことをよく示している。こうして、日本では「国民」という意識と実体は、一八八〇年代の後半以降に定着しはじめたといつてよいだろう(尹健次「民族幻想の蹉跌」)。

ここで「民族自決」というコンセプトに戻ろう。日本語で「民族自決」と訳される「民族」は、英仏語では「ネーション」「ナショナル」つまり「国民」の意味でもあつた。もう一つ別に、「ピープル」(人びと)という表現も民族自決の文脈で用いられることがある。たとえば、国連憲章第一条では「ピープルの同権及び自決の原則」(注10)がうたわれている。国連の目的は、「ピープルの同権及び自決の原則の尊重に基礎をおく諸国間の友好関係を発展させること、並びに世界平和を強化するために他の適当な措置をとること」にあるといふ。こうしてみると、日本語で「民族」というと、なにかしら実体のある人間集団を思い浮かべがちだが、欧米での議論では「国民」になれると自己決定できる人びとという以上に積極的な意味はないといふ説にも耳を傾けたい(山影進「ナショナルリズムと国民国家」『民族に関する基礎研究』)。

すでに明治期の加藤弘(注11)之は、「族民」「民種」「種族」「国民」などの名称を使いながら、現在いう「民族」こそ国家を形成する主体であることを強調していた。明治国家においても、ドイツやイタリアの国家統一のプロセスに見られたように、国家形成は各民族の伝統と文化に深く根ざしたものでなければならず、独自の民族の力を前提とするはずだった。この力は、他の民族による抑圧や支配を排除する運動のなかで得られるものであつた。加藤弘之は、こうした考えをドイツの国家学者ブルンチュリ(注12)の「族民的の建国並びに族民主義」といふ論文の邦訳(一八八七年)などの作業から学んだといわれる。

(山内昌之『民族問題入門』による)

(注) 1 アダム・スミス……イギリスの経済学者(一七二三—一七九〇)。

2 ナショナルリズム……民族の統一・独立・発展を重視する思想および運動。

3 スターリンの定義……スターリンの著書『マルクス主義と民族問題』に示された、「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された人びとの堅固な共同体である」と

いう定義。

4 デウス・エクス・マキーナ……古代ギリシャの演劇における演出技法の一つ。解決困難な局面で、絶対的な神の力によって解決への方向が示されることで物語を収束させるという手法。

5 ベネディクト・アンダーソン……アメリカの政治学者（一九三六―二〇一五）。

6 民族自決……民族は、他の民族に干渉されることなく自らの政治組織を決定する権利をもつとする原則。

7 『国民之友』……一八八七年創刊の政治・経済・社会・文学に関する論説や文学作品を掲載した総合雑誌。

8 徳富蘇峰……ジャーナリスト・評論家（一八六三―一九五七）。明治政府の表面的な欧化政策を批判し、平民による下からの近代化を推進する「平民主義」を唱えた。

9 『ネーション』……一八六五年に創刊したアメリカの総合雑誌。国際的な評価が高く、政治・経済・社会の他、書評や演劇評なども扱う。

10 同権……同じ権利をもつこと。

11 加藤弘之……政治学者（一八三六―一九一六）。初代東京大学総理、帝国大学総長。

12 ブルンチュリ……ドイツの国家学者（一八〇八―一八八一）。

問一

傍線部 a 「これらの問いに答えるのは、二重の意味でむずかしい」とあるが、(Ⅰ) 第一の意味でのむずかしさ、(Ⅱ) 第二の意味でのむずかしさはそれぞれどのようなことか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 14・15。

(Ⅰ)

- 1 民族という比較的新しい考え方の定義は、独裁者とその支持者による思想統制がなされており、十分な議論がされていないこと。
- 2 民族の定義は、特定の人物の主張が盲目的に一部で支持されているだけで、理論的に検討され広く共有されている答えがないということ。
- 3 民族の概念は人びとの間で自然に発生し、当たり前のもものとして受け入れられたため、誰も意識的に考えようとすらしなかったということ。
- 4 民族という考え方の複雑さゆえに、論じる人の立場によって違った説明がされるため、学問的に民族を定義することができないということ。

(Ⅱ)

- 1 アンダーソンの「ネーション」という考え方が日本において強い影響力をもち、民族や国民という概念に誤った解釈が加えられたということ。
- 2 アンダーソンの「ネーション」という考え方を取り入れた結果、日本における民族や国民についての議論が表面的になっているということ。
- 3 アンダーソンの「ネーション」の定義にとらわれたがゆえに、日本において民族と国民の境界が曖昧になっているということ。
- 4 アンダーソンの「ネーション」の定義を取り入れる際に、本来区別すべきでない民族と国民を区別してしまったということ。

問二 傍線部 b 「西欧とその文化がおよんだ北米ではかなり以前から、「国民」と「民族」の重なりを当然と考える傾向があった」とあるが、それはなぜか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 。

- 1 民族性よりも「国」に対する帰属意識を優先する文化があったから。
- 2 ある人びとを他と区別する条件として「国」を用いることが自然なことだったから。
- 3 「国」で人びとを区別することを絶対とする社会観が政治的に作られていたから。
- 4 人びとのまとまりを意識する要素が「国」しかなかったから。

問三 傍線部 c 「国連の性格」とあるが、それはどのような性格か。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。

解答番号は 。

- 1 民族としてまとまりをもつ団体を国とみなすという性格。
- 2 国民をもち、主権性を有する団体のための組織であるという性格。
- 3 主権国家の成立に際して、民族の統一は必要条件ではないとする性格。
- 4 国際秩序を考える最小の単位として主権国家を用いるという性格。

問四 次の文は、傍線部 d 「民族」と「国民」との関係について説明したものである。空欄 ～ に入る語句は

なにか。次の 1 ～ 10 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は ～ 。

民族は に生まれ、国民は につくられる。主権をもつ を成立させ、 となるには、 としてのまとまりをもつ人びとの存在が不可欠である。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|-----|---|------|----|-----|
| 1 | 民族 | 2 | 国民 | 3 | 人種 | 4 | 国家 | 5 | 国連 |
| 6 | 自然 | 7 | 分離 | 8 | 意識的 | 9 | 生物学的 | 10 | 自発的 |

問五 傍線部 e 「福沢諭吉が明治七（一八七四）年に『学問のすすめ』で嘆いた」とあるが、どのようなことを嘆いたのか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 23。

- 1 「国民」の存在を前提とした近代国家を成立させるための努力をせず、安易に「国民」という概念を取り入れたこと。
- 2 「国民」の意志を主体的に捉えようとする政府に対し、それに応えようとする成熟した人民がいなかったこと。
- 3 「国民」という近代的なコンセプトを掲げながらも、実態は政府が人民をないがしろにしていたこと。
- 4 「国民」という言葉が使われているだけで、人民に「国民」としての意識が存在していなかったこと。

問六 傍線部 f 「こうした考え」とあるが、それはどのような考えか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 24。

- 1 各民族の伝統と文化は、他の民族による干渉から自分たちを守るなかで得られるものであり、そのような伝統と文化を継承するための基盤として国家が形成されるという考え方。
- 2 民族同士の抑圧や支配を克服するなかでそれぞれの民族に独自の伝統が生まれ、次第に国となることを目指す文化が発展することで国家が形成されるという考え方。
- 3 独自の伝統と文化への自覚や帰属意識をもった民族が、他の民族と接触することによって国としての独立を意識するようになり、国家が形成されるという考え方。
- 4 伝統と文化を有するある民族が民族の力を得るためには、他民族からの抑圧や支配を排除する経験が必要であり、民族の力を得た成果として国家が形成されるという考え方。

問七 文章中で使われている「民族」、「国民」という言葉についての説明として正しいものはどれか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 25。

- 1 英語の「ネーション」や仏語の「ナシオン」は、日本語の「民族」と「国民」の両方の意味をもつ。
- 2 日本語の「民族」は英語の「ネーション」と対応し、日本語の「国民」は英語の「ピープル」と対応する。
- 3 「国民」は日本語独自の言葉で、英語の「ネーション」や仏語の「ナシオン」に「国民」の意味はない。
- 4 日本語の「民族」と「国民」は常に互換可能な言葉であり、英語に訳すと「ネーション」になる。

問題三 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

自分の生い立ちを郊外族と称している友人がいます。両親とも関西から出てきて、東京郊外のシンコウ住宅地で育った。だから方言はないけれども、同時にまた自分の言語の属する「母なる国」がないと言います。母国語がないと言う。文学少年、文学青年、文学壮年という経歴の人物。ぼくの倍も日本語を知り、倍の語彙をらくらく使う男ですが、あえて方言を持つとすれば、それは文学という書き言葉なのだと言う。しかしそれは自分の土着語ではない。言葉と物とがバラバラになっているのをつねに感じる。そんなことを言います。

一方、その友人に言わせると、ぼくの場合は言葉と物とが一对一で強固に結びついている。そういう社会における言葉を身体に持っている、おそらく最後の世代だろうと言います。それがうらやましいと言う。

べんこふってるんでない（お世辞を言っているのではない）と受け取ることにして、さきほどの^(注1)よいも同様、ほぼ行方不明になつた語を一つ挙げます。

デレッキ——「先端の曲がつた鉄製の火掻き棒」（日本国語大辞典）。言葉と物とが一对一で強固に結びついている代表例かもしれない。

「畜生ッ！ 入るか!？」と云つて、そこにあつたストーヴを掻き廻す鉄のデレッキを振りあげた。

その男はストーヴのデレッキを持って、眼の色をかえて、又出て行つた。誰もそれをとめなかつた。

(I)

いずれも小林多喜二の小説にあるくだりですが、多喜二がわざわざ「ストーヴを掻き廻す鉄の」と書いたとは、いささか信じがたい。ひよつとして編集者が書き入れたのではないかと、勘ぐりたくなります。「ご飯を口に運ぶ二本の木の箸」とでも書くようなじれつたさがある。デレッキは、今ならリモコンと同じくらい、どこの家でも使っていました。デレッキと書けば、もうそれで充足している。

(II)

たんに棒でなく、ツルハシと合体したようなものです。しかもヒンパンにストーブの中を引つ掻き回す道具ですから、真つ赤に焼け

ている。幸いぼくは、人がデレッキを振り回す現場にソウグウした経験はありませんが、それでも灼熱の凶器が目の前に現れます。

(III)

初めは日本名はなかったでしょう。たんに、火掻きと言っていたと思います。(注2) クラーク博士らのアメリカ人が札幌農学校、今の北海道大学へ来たのは明治九(一八七六)年です。英語で火掻き用の棒はポウカー poker と言いますが、十九世紀の百科事典などを見ると、ポウカーはまつすぐな棒です。先端が鉤状かぎのものは見当たらない。先端の曲がった北海道製の火掻きを見て、英語を母国語とする者にとつてこれを poker とは呼びにくかった。むしろ derrick と命名した。チェック check がチッキ、デッキ deck がデッキ、ジャック jack がジャッキ、スティック stick がステッキ、オランダ語のブリック brick がブリキになったように、デリック derrick がデレッキになったのは自然です。

(IV)

英語デリックのアクセントはデに置かれますが、根室発音(注3)のデレッキのアクセントはレに置かれます。デレキとも言つて、やはりレにアクセントが置かれます。

(V)

方言のお話をしながら、活字では抑揚が伝わらないのが歯がゆいですね。一つ一つ説明するのもうつとういでしょう。一つだけ代表的なものを挙げると、猫。東京ではネにアクセントが置かれますが、根室ではコにアクセントを置く。どっちがどっちだったかこんぐらかつていた時期があつて、東京式の発音ができるようになるには年月がかかりました。

同様に、なべ、そば、おやじ、雨、雨がやんだ、歯がやんでやんで……。

ぼくのヤナセという姓、ナオキという名、これが東京では根室と違う。自分の姓名が拉致らちされるのを感じました。そして今や、東京暮らしが長くなるうちに、その拉致された姓名を名告なるようになってしまいました。

抑揚は、いまもつてよくわからない。

トリノオリンピックという言葉葉を初めて耳にしたとき、鳥のオリンピックという珍しい催しが行われるのだと思いましたが、ジョウダンではありません。実体がわかってから、NHKのトリノオリンピックの発音を何十回聞いても、やはり「鳥のオリンピック」にか聞こえない。「プッチーニ(注4)作曲の『マノン・レスコー』はトリノで初演された」と言うときのトリノとは違う抑揚になっている。ぼくはNHKを全面的には信頼しないので、「鳥の」でないトリノでトリノオリンピックと言っています。

抑揚といえば、このごろはだいぶ下火になったようですが、妙な尻上がり口調、語尾上昇ファッションというものが蔓延した時期がありましたね。ぼくが東京で三十年以上暮らして、ようやく東京アクセントを習得したかと安心しかけたところへ、コンピュータ・ウイルスに感染したみたいに大人たちが次々と新アクセントで話す。

——どうも今の若者の方言が伝染しているような感じがするね。

——日本人がみんな分こういうしゃべり方分されるといちいち分首をこつくり分うなずかなくちゃならないでしょ？

上昇アクセントのたびに首を軽くふらねばならないのですから、単純な会話をするだけでこわくてこわくて（根室弁で、非常に疲れるの意味です）。かつまた怖い。イヨネスコの『犀』を思い出しました。芝居と短篇の両方があります。レストランでちらりと犀を見かける。そのうちまわりの人間が次々に犀に変身する。まさかと思っていた親しい友人まで、犀に変身する。そういう話です。

B、プロ野球の解説者や有名な監督など、テレビにしばしば登場するいろんな大人が感染し、ついにはぼくの付き合いのある大人たちまで感染しました。年長者のしゃべりかたを年少者がまねるのが自然なはずなのに、また、年長者が年少者の変なしゃべり方を注意してやるべきなのに、ぼくを含めて大人がみんな時代の流れにまかす。まずいですね。

まかすといえば、「ジョイスのおんちゃんの本にお茶まかした」と言いました。根室方言の「まかす」は、こぼす、撒き散らすの意味です。

ひよつとして、これは深いところで古語とつながっていないだろうか、ぼくは考えています。「まかす」は——「引す」「漑す」の表記があります——田んぼや池などに水を引き入れるの意です。徒然草に「亀山殿の御池に大井川の水を引せられんとて」とあり、蜻蛉日記や無名抄などにも同じ使い方が見えます。

それからさつき、「歯がやんでやんで……」と言いました。多くの読者には意味が通じなかったかもしれない。歯が痛くて痛くて……の意味です。そして枕草子に「歯をいみじう病みて」、古今著聞集に「この疵のあと病む」などとあり、病むが痛むの意で使われている。

わずか二語ですが、方言というものは日本の古い言葉を記憶しているのではないか、そんな思いが浮かびます。

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく

という短歌がありますね。日本人ならたいいていの人が知っているように、作者は石川啄木です。

C たいいていの人がそうでしょ

うが、この場所、停車場とは上野駅のことだと、ぼくも国語の授業で教わりました。

これをもじって、寺山修司さんはこう詠んだ。

ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにかし

この場所は、たぶん高田馬場にあつたモカ珈琲という喫茶店でしょう。寺山さんは東北訛りを直さなかつた。そして最先端のゼンエ|イ演劇を創造した。その最先端演劇をパリへ持つて行つた。「いまホテルの部屋でメイドのお尻を眺めています」という絵葉書をパリからもらったことがあります。対談したこともあります。東北訛りで話すぬくもりを感じつつ、天才の発語の一つ一つにとても緊張したのを昨日のことに思い出します。

要するに、寺山さんのような天才にとつて、東北訛りを直す必要はなかつたし、東京語の中で生活していても東北訛りはびくともしなかつたのですね。ところが凡才は、せめて田舎訛りを直そうと努めたり、やすやすと標準語訛りに屈服して、しかも必ずどこかでポ口を出す。

ふるさとの訛りなだめつ英語にて挽回センヌと馬券買う

「挽回センヌ」は、パリ近郊のヴァンセンヌ競馬場でしょう。負けを挽回せんと、フランス語をしゃべれない男が英語で馬券を買っている——日本語の田舎訛りが出ないように英語をなだめながら。作者の名は伏せておきましょう。

(柳瀬尚紀『日本語は天才である』による)

(注) 1 ごしよいも……北海道の古い方言で「じゃがいも」のこと。

2 クラーク博士……アメリカの教育者(一八二六—一八八六)。

3 根室……北海道の地名。

4 プッチーニ……イタリアの作曲家(一八五八—一九二四)。

- 5 イヨネスコの『犀』……フランスの劇作家ウジェーヌ・イヨネスコの戯曲。犀とは動物のサイのこと。人間の条件の不条理さや全体主義の恐怖と滑稽さが描かれている。
- 6 上野・8 高田馬場……どちらも東京都の地名。
- 7 寺山修司……歌人・詩人・劇作家（一九三五―一九八三）。

問一 傍線部 a・d・e・h・j と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、マ

クしなさい。解答番号は 26 ～ 30。

a 「シンコウ」

- 1 鎌倉幕府のコウボウをかけた争い。
- 2 彼はコウシユともに優れた選手だ。
- 3 田舎でセイコウウドクの生活をする。
- 4 大航海時代にコウリヨウの取引が行われた。

d 「ヒンパン」

- 1 ライヒン席に案内する。
- 2 ヒンコウホウセイな人物。
- 3 ヒンカイにわたる手術を必要とする。
- 4 語彙がヒンジャクだ。

e 「ソウグウ」

- 1 ホウソウ界を代表する弁護士。
- 2 ソウオンに悩まされる。
- 3 事件のソウサが行われる。
- 4 雪山でソウナンする。

h 「ジヨウダン」

- 1 トウジヨウ手続きを済ませる。
- 2 ビールをジヨウゾウする。
- 3 ジヨウチヨウな部分を削除する。
- 4 海がもつジジヨウ作用。

j 「ゼンエイ」

- 1 エイダンを下したことを評価する。
- 2 公衆エイセイに寄与する。
- 3 過去のエイコウにすぎる。
- 4 週末にエイガを見る。

問二

傍線部 b 「あえて方言を持つとすれば、それは文学という書き言葉なのだと言う」とあるが、それはどのようなことか。次の

31。

- 1 自分が使う言葉はすべて文学という書き言葉から学んだということ。
- 2 自分に最も根づいている言葉が文学という書き言葉だということ。
- 3 文学という書き言葉の世界でなら方言を持つことができるということ。
- 4 文学という書き言葉を通してしか方言に接する機会がないということ。

問三

傍線部c「言葉と物とがバラバラになっているのをつねに感じる」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 32。

- 1 言葉は生活する中で物との結びつきが強固になるものなので、文学を通して言葉に親しんだだけの自分は空疎な言葉しか持たず、言葉を使いこなせていないと感じること。
- 2 言葉は生活を通して会得することで物との結びつきを強めるが、方言を持たず一般化された言葉を使う自分は言葉と生活世界との強い結びつきを感じられないということ。
- 3 多くの語彙を知っていて使うことができるが、それらは方言のように生活に根ざした言葉ではないので、言葉と物とが一致しない場合があるということ。
- 4 生活の中で自然に身につけていく方言のような言葉を持たず、言葉と生活が密接に結びついていないので、自分が使う言葉に愛着が持てないということ。

問四

本文では次の部分が抜けている。この部分が入るべき箇所は本文中の(Ⅰ)～(Ⅴ)のどこか。次の1～5のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 33。

日本国語大辞典での初出は昭和三(一九二八)年。語源は載っていませんが、ぼくは英語のデリック *derrick* にちがいないと確信しています。*derrick* は起重機^(吊)ですが、先端に付いているフックがデレッキの先端そっくりです。

(注) クレーンのこと。

- 1 (Ⅰ)
- 2 (Ⅱ)
- 3 (Ⅲ)
- 4 (Ⅳ)
- 5 (Ⅴ)

問五 空欄 A・B・C に入る語句はなにか。次の1～10のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。解答番号は 34 36。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|------|---|------|----|-----|
| 1 | そして | 2 | しかし | 3 | 一方 | 4 | あるいは | 5 | だから |
| 6 | たとえば | 7 | さて | 8 | すなわち | 9 | では | 10 | すると |

問六 傍線部 f 「活字では抑揚が伝わらないのが歯がゆいですね」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適

当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 37。

- 1 活字では伝えられないが、標準語と方言ではアクセントの位置が違うので使い分けるのが面倒だということ。
- 2 方言を語るには標準語との抑揚の違いに触れないわけにはいかないが、活字で説明するのは困難だということ。
- 3 方言の特徴的な抑揚を活字として表現するのは不可能に近く、方言のよさを伝えられずに残念だということ。
- 4 話し言葉である方言を書き言葉の活字で説明すると、微妙な抑揚が伝えきれずもどかしいということ。

問七 傍線部 g 「自分の姓名が拉致されるのを感じました」とあるが、それはどのようなことか。次の1～4のうちから最も適当なも

のを一つ選びマークしなさい。解答番号は 38。

- 1 東京に来て、自分の意志とは関係なく強制的に姓名を変えさせられたということ。
- 2 根室のアクセントでは伝わらないため、東京のアクセントで名告るしかなかったということ。
- 3 東京のアクセントで聞く自分の姓名は、別の人として扱われているような違和感を覚えたということ。
- 4 根室とは違う発音で呼ばれて、不本意ながら自分の名前が別のものになったような気がしたということ。

問八 傍線部 i 「ひよつとして、これは深いところで古語とつながっていないだろうか」とあるが、筆者はこれについてどのように結論づけているか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 39。

- 1 方言は標準語に比べて、古い言葉との関わりが顕著である。
- 2 方言の中には、昔に使われていた意味を受け継いでいるものがある。
- 3 一部の方言には、その土地独特の価値観が反映されており、解釈する上で古語を参照する必要がある。
- 4 方言には古語と同じ意味を持つものがあるが、わずかに二語しかないので、単なる偶然に過ぎない。

問九 傍線部 k 「天才」とあるが、この表現から筆者は寺山修司をどのように評価していると読み取れるか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 40。

- 1 自らが何をなすべきかを理解して役割を果たすことができる存在。
- 2 周囲の人とあえて違うことをすることで、個性を際立たせている存在。
- 3 周りにおもねることなく自らの世界観を表出できる存在。
- 4 突出した才能と独特の感性をもち、異質と捉えられることのある存在。